

## HANDS—新たな始動

国際学部 立花 有希

ご挨拶

2022年春、HANDS創設以来つねに先頭に立って本事業を展開されてきた田巻松雄先生のご定年に伴い、代表を引き継ぐことになりました。折しも多文化公共圏センターの改革と時期が重なったこともあり、その趣旨にも照らしながら、HANDS事業の新しい形を模索しているところです。これまでHANDSが大切にしてきた理念を継承しつつ、活動内容を再構成し、他方で関係者の輪を広げて、新たな試みにも挑んでまいります。HANDSに対する期待や要望など、みなさまからの声をお寄せいただけますと幸いです。今後のHANDS事業にも変わらぬご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

今年度は、国際学部新たに着任された申恵 媛助教がHANDSメンバーに加わり、さっそくこれまではなかった風が吹き始めました。HANDSの新たな始動の年となったこの一年間を以下に振り返り、事業内容のご報告といたします。それぞれにご協力くださった学内外のみなさまに心より感謝申し上げます。

### 外国人児童生徒教育推進協議会報告

外国人児童生徒教育推進協議会は、栃木県教育委員会と県内11市町（那須塩原、大田原、宇

都宮、鹿沼、真岡、小山、栃木、佐野、足利の各市と壬生、高根沢の各町）の教育委員会および小中学校の代表、そして多文化公共圏センターの関係者を構成員とする会議で、2010年度から継続して定期的開催されている。今年度は、第1回を2022年9月22日に本学UUプラザにて、第2回は2023年1月30日にZoomによるオンラインで実施し、それぞれ多数の出席を得た。第1回には、「第12回栃木県外国人生徒進路状況調査」の結果報告と外国人児童生徒の保護者との協力のあり方に関する意見交換の2つを中心に、情報共有、意見交換を図った。第2回は、「国際比較の観点から考える外国人児童生徒教育の現状と課題」と題する話題提供を糸口として、外国人児童生徒の学力についての各自自治体、各学校の認識をうかがった。さらに、本協議会の今後のあり方について、それぞれの立場から議論することとし、まずは大学という組織からの見解について中村真国際学部長より説明いただいた。残念ながらそこで時間が尽きてしまったため、教育委員会や学校、宇大関係者からの意向や提案については、来年度の協議会への持ち越しとなった。第2回の議題2つは、どちらも限られた時間の中で問題意識の共有を図る難しさを痛感すると共に、多様な声を引き出す必要

性を思い知らされるものであった。協議会の外での接点も探りながら、この会がその名称の通り、外国人児童生徒教育の推進を協議する場として機能するよう、知恵を絞り、力を注いでいきたい。



#### 多言語による高校進学ガイダンス

2020年以來、オンライン開催となっていた「多言語による高校進学ガイダンス」を本年度は対面で開催することができた。2022年9月11日(日)、本学大学会館にて行われたガイダンスには、事前申し込みのあった8家族のうち5家族の参加があり、少人数ながら中身の濃い時間が流れた。近年は個別相談のみの形となっていたが、久々に「元・外国人児童生徒」の体験談として、二人の国際学部生に自分史を語ってもらったところ、好評を博し、早くも次年度の体験談報告者についての案が上がっている。記録係として参加した学部生は、直に触れる現実に圧倒されたり、通訳役のバイリンガル学生・卒業生の姿に外国語習得意欲をかきたてられたりしていた。この教育的効果をより意図的、計画的に追求することを目的の一つとして、来年度は本ガイダンスを組み込んだ授業科目が開講される予定である。

#### HANDSでの活動の単位化

2022年度には、HANDSメンバーのスエヨシ・アナ国際学部准教授のご尽力により、HANDSの活動を組み込んだ授業科目が新たに提供された。「グローバルAL(アクティブ・ラーニング)演習I」という国際学部の既存科目を活用したもので、多言語による高校進学ガイダンスなどHANDSの活動で日本在住のスペイン語話者と実践的なコミュニケーションを図る機会が「グローバルな環境下におけるアクティブ・ラーニングを通じ、異なる文化や社会を体験することで、多文化共生社会に関する問題意識を涵養する」ことや、「実践的な活動を通じ、諸外国の伝統文化や現代社会、日本と当該国との関係への理解を深め、自らのキャリア形成の深化を図る」ことにつながるとして、単位付与に値する具体的な活動と時間数を割り出した上で始められたものである(引用はいずれも当該科目のシラバスの授業目標より)。想定される会話でのスペイン語表現集も用意されるなど、テーラーメイド型の実践的学修として、多くの示唆に富む事例となったことを広く知っていただきたい。

#### 学生主体の活動

以上で触れなかった事業としては、学生ボランティア(小中学校での個別支援、スペイン語教室 AMAUTA での夏期集団支援)とサマースクール(宇都宮市および那珂川町とのイベント)の実施があり、いずれも学生が中心となって展開されているものである。学生の意欲、企画力、実行力にはいつも舌を巻くばかりで、そうした面が遺憾なく発揮され、そこから学生同士で学び合うことのできる機会をこれからも用意していきたいと考えている。活動の具体的内容については、それぞれに関わった学生の体験記として、これに続くページで報告されているので、どうぞそちらをご覧ください。

## 学習支援を通じた気づきと学び



地域創生科学研究科博士前期課程 2年

アギーレ ナルミ

国際学部国際学科 2年

清本 まゆみ

私達は、現在、県内のある小学校の日本語教室で、スペイン語を母語とする児童に対して学習支援を行っています。学年は、2年生と6年生の2名を主に支援しています。2名ともまだ日本語による会話が少し難しいので、スペイン語と日本語を使って勉強の内容を説明しています。

2年生の児童は、一昨年から継続して支援している児童です。1年生の頃は、日本語で会話をすることが難しく、休み時間の会話や学習内容の説明は、全てスペイン語でしなければなりませんでしたが、2年生になった現在では、日本語で話しかけてくれるようにまでなりました。しかし、日本語の習得は、日常的な会話場面に限られてしまっていることに、学習支援を通して気が付きました。今までの学習内容は、スペイン語で説明できる範囲内の内容でしたが、学年が上がるとともにその内容が難しくなってきたこと、さらに、その児童が教科学習に使われるようなスペイン語に触れた経験がないため、単にスペイン語に通訳するというわけにもいかないことから、支援の難しさを実感しています。日本語もスペイン語も発達途中にある故の困難を初めて肌で感じました。

小学校6年生の児童には、主に算数を教えています。彼はまだ日本語がよく理解できないため文章問題はまだ解けませんでしたが、算数が

好きなため、掛け算や割り算の問題を黙々と解いていました。担任の先生から彼に日本式の筆算を教えて欲しいと頼まれたので日本式の解き方を教えました。最初は数字しか使わない計算を教えることは簡単だと思っていましたが、今まで解いてきた方法を何故変えなければならないのかを小学生に説明するのは難しかったです。彼に納得してもらうために、日本では理解度を確認するために計算式も書かなければならないこと、南米式で解いてしまうと先生が理解できず答えが合っていない不正解とされてしまうことを説明しました。彼は最初、不満げな表情で南米式のまま解き続けましたが、何問か一緒に解くうちに日本式で解いてくれるようになりました。この経験を通して、勉強をする理由を子どもに説明し納得させる難しさと重要性を学ぶことが出来ました。

このように、現在実施している学習支援は、児童との向き合い方や教え方などに少し困難を感じる部分もありますが、毎回の支援で彼らから学ぶことが多くあります。今の私達にできることは、彼らが学校で取り残されてしまうことがないように、継続性のある支援を実施すること、そして彼らに寄り添うことだと考えています。過去には当事者でもあった私達だからこそ、彼らに寄り添う心を持つことが大切だと思います。

## スペイン語圏にルーツがある児童生徒との交流



国際学部4年

陳 泓 宇

「親に言われたからやっているけど、スペイン語が嫌いなので、スペイン語で話しかけるのをやめて」というのはペルーにルーツがある子供への学習会 AMAUTA で担当になった A 君に言われた最初の言葉であった。スペイン語で話しかけたら、親近感を持たれるのではないかと思っていたから、ガッカリした。もう一つ言語を運用できることがどれほど有利かは言うまでもないのに、子供を相手にムキになってはいけなと自分に言い聞かせ、その場では否定しなかった。

初めからにらみを利かされたが、相手は所詮七、八歳の小学生だった。難しい漢字が書けたらすぐに自慢してくるし、ちょっとだけ目を離したら、鉛筆と定規で戦闘機のようなものを組み立てて、隣の机の子と対戦を繰り広げる。止めさせられ、算数の問題に向き合わされたら、5分経たずに、またざわつき始める。何回か授業して懐かれると、完全に世代違いなポケモンをどんどん紹介してくるし、週末に行った水族館で見た大西洋なんか魚の話をこのサバとアジすら区別がつかない私に無我夢中でしてくれる。この遥々ペルーから来た子もチョコが好きで、ひと粒でももらったら、すぐ夏休みの課題が吹っ飛んだかのように笑顔を見せてくれるが、他の子が自分より1粒でも多くもらっているのを知ったら、またすぐに怒り出して、ワアと泣き出しそうになる。

このような天真爛漫な子供たちは歲月人を待たずに成長し、あっという間に高校受験で選抜を受ける歳になる。AMAUTA が終わって一か月後、宇大で開催された「多言語による高校進学ガイダンス」では、ペルーから移住してきた B 君一家に出会った。B 君は受験を控えている

のに、ガイダンスの時終始一言も話さず、ひたすらお母さんのちょっと後ろで黙って聞いていた。むしろ、B 君の父母の方が積極的に高校の情報や日本の進学システムについて聞いてくれた。B 君はただ一度だけ、趣味のサッカーの話の時、自分に関連性を感じたかのように笑顔を見せてくれた。しかし、自分の高校受験の時を思い出してみれば、中三の私でも人生プランなんか真剣に考えた事はなかったし、高校は親が決めてくれるだろうと何も目に入れていなかったけど、安心感はあったなあ、と B 君を見て懐かしくなった。それでも、その夫妻にとって、学費の高さや学校行事の充実度より、息子に日本語教育を提供できるかどうかにもものすごく関心があったところが印象的であった。

改めて考えると、あるとき私が A 君に言われた言葉を否定しなかったのは、子供を相手にしているからというより、心の底のどこかで賛同していたからかもしれない。「みんな同じ」、「協調性・協働力」が標語として打ち出される教育の場にいる、海外にルーツがある子供にとって、スペイン語ができる事は確かに邪魔くさいかも



AMAUTAの様子(2022年7月27日)  
真岡市国際交流協会のタカハシ・タカシ氏より



しれない。なぜなら、ここで共生を目指すなら、「日本語」が出来ないといけない科目になるから。得意科目・不得意科目があってもいいはずなのに、「日本語」という科目が絶対的な優位に持ち上げられている。自文化への誇りや大切さなどより、

「日本人」に合わせて「日本語」を話すことがよほど緊急なことになるだろう。しかし、このような海外から来た人々に迎合を強いる多文化共生が果たして良いかという疑問は、ずっと頭から消え去る事はなかった。

## 令和4年度 子ども国際理解サマースクール報告

### サマースクールに参加して

国際学部3年 高良 ユカリ

今回のサマースクールの企画運営は、私にとってとても貴重な経験となりました。過去のサマースクールに参加したことのある学生スタッフがいなかったことで、大きな不安を抱えていました。前日まで、自分たちが企画したものが上手くいくのか、ずっと心配でした。しかし、当日は子どもたちが楽しんでいる姿を見て安心しました。

サマースクール午前の部では、スタンプラリーを通して子どもたちにフランス・ドイツ・ブラジル・フィリピン・ペルー・中国・カンボジアについて学んでもらいました。各国の世界遺産や食べ物、文化、日本とのつながりなどについてあらかじめ作ったポスターを使いながら簡単な説明を行った後、クイズに答えてもらうというような形で行いました。多くの子どもたちが「それ知っている!」「食べてみたい!」「これはどうなの?」などと各国に興味を持ってくれたことに驚きました。午後の部では、ドイツ・ブラジル・フィリピン・中国・アメリカの遊びを体験してもらいました。また、いくつかの国の伝統衣装を準備し、着付け体験も行いました。子どもたちの楽しそうに遊んでいる姿や伝統衣装を着ている姿がとても印象的でした。

企画の段階では、子どもたちが楽しみながら異文化について学んだり触れたりできることをつねに意識していました。そのため、子どもたちが楽しんでいる、興味を持ってくれている様子を見てとても嬉しかったです。今回のサマースク

ルには、ドイツとカンボジアからの留学生や外国にルーツのある学生が多く参加してくれました。このような、学生と一緒に遊んだことや一日を過ごしたことは子どもたちにとってとても貴重な機会になったのではないかと思います。異文化について楽しく学んだこと、興味を持ったこと、外国にルーツのある大学生と一緒に過ごしたことが参加してくれた子どもたちに何か影響を与えることができたら嬉しいです。

他者・文化を理解するためにはまずは、興味を持つことが重要だと思います。そして、今回のサマースクールが子どもたちにこのような機会になったのではないかと思います。サマースクールを通して感じたこと、学んだことが子どもたちのどこかに残って、いつか役に立つことができればとても嬉しいです。私たち大学生にとっても、今回のサマースクールはたくさんのことを学ぶことができた素晴らしい機会でした。



# 那珂川町国際交流事業 国際交流体験 報告

国際学部1年 松本 愛未

2022年10月8日、那珂川町主催の国際交流体験が開催された。那珂川町は毎年中高生を対象に海外訪問を行っていたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響でここ数年は実施を見送ってきたとのことだった。そこで、それに代わるものとして、私たち HANDS Jr. に国際理解・異文化交流につながるイベントの企画をしてほしいとの依頼があった。「異文化に触れる」「世界について考える」という二つをテーマに企画を考えた。

「異文化に触れる」ということで、留学生による出身国紹介、アメリカの学校紹介、民族衣装体験などを行った。特に留学生のコーナーは大変盛り上がった。留学生が教えてくれた簡単なあいさつや単語を子どもたちは繰り返し言い、違った生活様式に驚きの声があがるなど異文化に興味をもってくれた。民族衣装体験では、カラフルな衣装を身にまとい、笑顔でお互いの写真を撮っていた。特にチマチョゴリの人気が高かったのが印象的だった。

二つ目の「世界について考える」の企画は、苦勞したことの一つだった。小学生から高校生までの幅広い参加児童・生徒たちに楽しみながら世界について考えてもらうにはどうすればよいのかととても悩んだ。しかし、大学生であるメンバーがただ一方的に誘導するのではなく、自発的に考えてもらうことが理想だと考えた。話し合いを重ね、貿易ゲームというゲームをする

ことにした。これは、一グループを一国として、各国によって量の異なる与えられた道具（文房具）と材料（紙）で、指定した製品を作りお金を稼ぐゲームだった。参加者は作業しているうちに各国に与えられたものの量が違うことに気づく。そして、国同士で交渉（貿易）をしていく。「そういうことか!」と参加児童・生徒たちが知恵を働かせて自主的に動く姿が見られた。このゲームを通して、国同士の協力の大事さを一緒に感じる事ができた。小学生にとっては少々難しい内容だったが、年上の中高生がサポートしてくれたことで楽しんでくれたようだった。そのような姿を見ることができて大変うれしかった。

子どもたちの外国や世界の興味への興味を広げることが少しでもできたのではないかと感じている。子どもたちが様々な価値観や発見を得られる、そんなきっかけになる活動をこれからも続けていきたいと思う。



# 2022年度栃木県における 多言語高校進学ガイダンスの開催状況

国際学部附属多文化公共圏センター研究員

田巻 松雄

はじめに

2023年1月22日(日)に「第22回 高校進学・進路ガイダンス主催者交流会 in とちぎ」がオンライン会議で開催された。各地域で多言語高校進学ガイダンスに関わっている関係者の年1回の交流会である。今回、ガイダンス開催状況は、茨城県、栃木県、埼玉県、福岡県の4県に絞って報告された。栃木県報告は、若林秀樹(本学客員准教授)と田巻が協力して準備した。本稿は、そこで報告した内容を一部変更の上掲載するものである。

1 栃木県の地域的特性

外国人住民数と日本語指導を必要とする外国人児童生徒数から栃木県の現状をみておく。

2021年12月31日現在の栃木県内市町の住民基本台帳に基づく外国人住民数は41,670人(対前年比1,158人減)で、県人口に占める割合は2.15%(対前年比0.04ポイント減)である。国籍・地域別、市町別外国人住民数の主な状況等については次のとおりである。

## 1 国籍・地域別外国人住民数(上位順)

1位	ベトナム	7,685人(対前年比 3.3%減)
2位	中国	6,107人(対前年比 6.5%減)
3位	フィリピン	4,786人(対前年比 2.2%減)
4位	ブラジル	3,842人(対前年比 3.9%減)
5位	ペルー	3,078人(対前年比 0.8%減)

## 2 市町別外国人住民数(上位順)

1位	宇都宮市	9,076人(対前年比2.8%減)
2位	小山市	6,851人(対前年比4.0%減)
3位	足利市	4,752人(対前年比3.8%減)
4位	栃木市	4,144人(対前年比4.7%減)
5位	真岡市	3,419人(対前年比0.1%減)

## 3 市町別人口に占める在住外国人数の割合(上位順)

1位	真岡市	4.29%(対前年比0.00ポイント増)
2位	小山市	4.09%(対前年比0.16ポイント減)
3位	足利市	3.30%(対前年比0.08ポイント減)
4位	栃木市	2.64%(対前年比0.11ポイント減)
5位	佐野市	2.43%(対前年比0.04ポイント減)

2021年5月1日現在、栃木県の公立学校の児童生徒のうち、日本語指導が必要な児童生徒数は小学校582人、中学校124人、高等学校49人、特別支援学校18人、義務教育学校1人で、計774人である。その主要母語別内訳は、スペイン語201人(26.0%)、ポルトガル語115人(14.9%)、フィリピン語86人(11.1%)、中国語48人(6.2%)で、この4言語で全体の58.2%を占める。

## 2 ガイダンス開催状況

コロナ渦の中ではあったが、7回のガイダンスがすべて対面で実施された(表1参照)。宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDS事業主催が3回、自治体(佐野市、栃木市、真岡市)主催が各1回計3回、民間団体(NPO法人小山国際交流会おいふぁ)主催1回である。主催団体の多様化と地域的な広がりがゆっくりではあるが進行していると言える。

表1 ガイダンス開催内容

名称	開催団体等	期日、会場	参加者数	対応言語
外国語による進学ガイダンス	佐野市教育委員会	6月24日(金) 佐野市文化会館	14人 (生徒+保護者+卒業生)	ポルトガル語、スペイン語、中国語、英語、タガログ語、日本語
外国人の親子向け高校進学ガイダンス	真岡市教育委員会	6月26日(日) 真岡市公民館	17家族 (19人)	スペイン語、ポルトガル語、中国語、ウルドゥー語、タガログ語、英語、シンハラ語
栃木県高等学校進学フェア、多言語進学ガイダンス	下野新聞社 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDS事業	9月4日(日) 栃木県 総合文化センター・ ギャラリー棟 (宇都宮市)	2家族 (5人)	フィリピン語、スペイン語、ポルトガル語、中国語
多言語による高校進学ガイダンス	宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDS事業	9月11日(日) 宇都宮大学 峰キャンパス	5家族 (13人)	ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、中国語
栃木県高等学校進学フェア、多言語進学ガイダンス	下野新聞社 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDS事業	9月19日(月) とちぎ岩下の 新生姜ホール (栃木市)	4家族 (9人)	フィリピン語、ポルトガル語、中国語、ウルドゥー語
多言語による進学・学校生活ガイダンス	栃木市教育委員会	10月1日(土) キョクトウとちぎ 蔵の街楽習館	8家族	スペイン語、ビサヤ語、ネパール語、ウルドゥー語
外国人親子向け高校進学ガイダンス	NPO法人小山国際交流会おいふぁ	10月10日(月) 小山市城南市民交流 センター・ゆめまち	5家族 (9人)	ウルドゥー語、英語、スペイン語、ヒンドゥー語、中国語

## 3. ガイダンスや高校進学に関する課題等

多言語高校進学ガイダンスについては、主催団体の多様化と地域的な広がりが出てきている中で、関係者による情報共有と意見交換が今後

より重要となっていくと思われる。ガイダンスには、進学への動機づけ、説明、情報提供、相談等いくつかの役割があると思うが、ガイダンス後のフォローを行う体制づくりがより必要に



なっていくのではないか。特に、日本の中学校に在籍していない学齢超過外国人の受検を支えるには、アドバイスだけでは不十分で、教育委員会に同行するなどの支援行動も必要になるケースもある。

高校入試制度に関して、栃木県の場合、県立全日制課程を受検する外国人生徒のための「海外帰国者・外国人等の入学者に関する特別の措置」(A 海外特別選抜と B 海外特別措置) および県立定時制課程を受検する外国人生徒のための「海外帰国者・外国人等の入学者に関する特別の措置」がある。受検資格は高等学校長の判断で決められること、また、A 海外特別選抜は基本面接であるが高等学校長の判断で学校独自検査や作文が課される場合があること、B 海外特別措置は 3 教科+作文面接試験が実施されるなど、「特別の措置」とはいえ、なかなか厳しい現実がある。今年度 HANDS 事業が実施した調査 (12 回目の調査) でも、受検資格を満たしていると

思われる外国人生徒 15 名のうち措置利用者は 6 名で 4 割に留まっている。B 海外特別措置受検者 1 名は不合格であった。その他の事例としては、2021 年 6 月に日本語能力ほぼゼロの状態で来日した学齢超過のフィリピン人生徒は、2022 年度入試で A 海外特別選抜を認められたが、国・数・英の学力試験を課され、不合格となった事例がある。本人曰く、国語が全く分からなかった。定員内不合格を出すことの是非についても議論が必要と思える。2022 年度入試で「海外帰国者・外国人等の入学者に関する特別の措置」を利用し 40 名定員の定時制課程を受検したペルー人の学齢超過生徒は、受検者 20 名のうち唯一の不合格者となった。

また、「海外帰国者・外国人等の入学者に関する特別の措置」の利用状況と内定状況は、海外帰国者と外国人との合計値で公表されており、この制度の外国人生徒の高校進学における効果が見えにくい状態が続いている。

## 第 22 回 高校進学・進路ガイダンス主催者交流会 in 栃木

1. 日時 2023 年 1 月 22 日 (日) 13 時 00 分から 16 時 30 分まで
2. プログラム内容

### <全体会>

- ①主催者挨拶：実行委員会委員長 田巻松雄 (栃木県ガイダンス主催者交流会準備委員会)
- ②ガイダンスや現在の状況について、茨城県、栃木県、埼玉県、福岡県からの報告
- ③栃木県からの報告
  - ・宇都宮大学国際学部の外国人生徒入試の意義と課題  
発表者：田巻松雄、久富アリネリサ (大学院 1 年)、セキブンカン (学部 3 年)
- ④高校での入学後の支援について
  - ・神奈川県立相模向陽館高校 (多部制定時制) 発表者：黒田協子さん
  - ・大阪府立東淀川高等学校 (全日制普通科) 発表者：酒井清夏さん

### <テーマ別分散会>

全体大会の②～④の発表ごとに 3 つのブレイクアウトルームに分かれ、発表者を交えて意見交換をします。

### <振り返りの全体会>

テーマ別分散会の話し合いを踏まえて、自由に議論します。

### <閉会・事務連絡>

閉会挨拶・事務連絡

主催：栃木県ガイダンス主催者交流会準備委員会  
高校進学・進路ガイダンス主催者交流会  
問合せ先：栃木県ガイダンス主催者交流会準備委員会

## 事務局だより

### 令和4年度活動

1. 外国人児童生徒教育推進協議会（栃木県教育委員会 後援）  
第1回：2022年9月22日（宇都宮大学 UU プラザにて対面で開催）  
第2回：2023年1月30日（オンライン開催）
2. 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣（通年）
3. 真岡市 AMAUTA 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア夏期集団派遣：  
7/27、8/3、8/10、8/17の合計4回（参加延べ人数33名）
4. 子ども国際理解サマースクール（宇都宮市東生涯学習センターとの協働）：8月2日
5. 多言語による高校進学ガイダンス  
下野新聞社主催の栃木県高等学校進学フェアへの参加：9月4日（宇都宮会場：栃木県総合文化センター）、9月19日（栃木会場：とちぎ岩下の新生姜ホール）  
宇都宮大学主催：9月11日（大学会館）  
\*その他、6月26日（日）真岡市教育委員会主催「外国人の親子向け高校進学ガイダンス」にシンハラ語通訳1名（本学学生）派遣、10月1日（土）栃木市主催の多言語ガイダンスに多言語資料を提供
6. 那珂川町国際交流イベント（那珂川町教育委員会と共催）：10月8日
7. ニュースレター『HANDSnext』第28号の刊行：3月
8. 栃木県における外国人生徒の進路状況調査：2月～3月

\*真岡市国際交流協会「イヤー・エンド・パーティ」は新型コロナウイルスの影響で中止。

## HANDS next とちぎ多文化共生教育通信 第28号

2023年3月1日発行

発行：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDS事業

（代表：立花有希）

事務局：〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

TEL 028 (649) 5196 FAX 028 (649) 5228 HP: <https://cmps.utsunomiya-u.ac.jp>

印刷：鈴木印刷株式会社 〒321-0901 栃木県宇都宮市平出町3751-11